

令和6年度第2回

松本市総合教育会議会議録

松本市教育委員会

令和6年度第2回松本市総合教育会議会議録

令和6年度第2回松本市総合教育会議が令和6年11月21日午後1時15分市役所第一応接室において開催された。

令和6年11月21日（木）

議 事 日 程

令和6年11月21日午後1時15分開議

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 議題
 高校改革への期待 ～夢に挑戦する学び～
- 4 閉会

〔構成員〕

市	長	臥 雲 義 尚
教 育 長		伊佐治 裕 子
教育長職務代理者		小 柳 廣 幸
委 員		佐 藤 佳 子
〃		春 原 啓 子
〃		福 澤 崇 浩

長野県教育委員会事務局
高校改革推進役

今 井 義 明

教 育 顧 問

荒 井 英治郎

〔事務局構成員〕

副 市 長	宮之本 伸
総 務 部 長	田 中 史 郎
教 育 次 長	赤 羽 志 穂
教 育 監	坂 口 俊 樹
行 政 管 理 課 長	松 本 志 保
学 校 教 育 課 長	清 沢 卓 子

〔事務局〕

教 育 政 策 課 長	小 西 え み
教育政策課	
教育政策担当係長	降 旗 基
教育政策担当係長	伏 見 宏 美
学校教育課	
学 務 担 当 係 長	堀 金 孝 志
学校支援室主任指導主事	関 健一郎
学校支援室指導主事	水 野 真二郎

≪開会宣言≫ 午後１時１５分

教育次長は令和６年度第２回松本市総合教育会議の開会を宣言した。

赤羽教育次長 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和６年度第２回松本市総合教育会議を開催いたします。

私は、本日進行を務めます教育次長の赤羽志穂です。よろしくお願いいたします。

この会議は公開とし、お手元の次第により進行いたします。なお、この後、定例教育委員会が予定されておりますので、議事はおおむね１４時４０分をめどとしたいと思います。

最初に、この会議を主宰する臥雲市長からご挨拶をお願いいたします。

臥雲市長 皆さん、こんにちは。本日はお忙しい中、教育長並びに教育委員の皆様、第２回総合教育会議にご出席をいただきまして、ありがとうございます。

前回は「子どもたちの多様な学びを保障するために」というテーマで、不登校の子どもたちを民間で支援されている岩田清美さんからお話をいただきました。関係者の定期的な懇談会を開催することや当事者への経済的な支援という観点について、ご提案をいただいたわけでございます。

そして、この議論を受けて実際に８月に懇談会を立ち上げて、さらに１０月には学校関係者や不登校の当事者も加わって懇談を重ねてきたと聞いております。総合教育会議での議論を実際のアクションにつなげていくことができた一つの事例だと受け止めております。

今回のテーマを決めるに当たりましては、伊佐治教育長と、今、松本で暮らす子どもたちにとって、どんなことが最も関心が向けられているかという観点から考えまして、松本市あるいは松本市教育委員会の直接の所管ではない部分になるのですが、高校の在り方について皆さんと議論ができればということで、「高校改革への期待」というテーマで今回の会議を開催させていただきました。

今週日曜日に「松本子どもの権利の日」市民フォーラムという催しがあり、高校生３０人ぐらいと私と教育長で意見を交わしました。将来の松本についての提言や要望に私たちが答えるという会でした。改めて、これからの松本市の将来を考えて、松本で暮らす高校年代の子どもたちに対してどのような

アプローチができるのかは非常に重要だと感じた次第でございます。

そこで、今日は長野県教育委員会から高校改革推進役であります今井義明さんをお迎えして、高校改革の取組みについてお話をいただいて、皆さんと意見交換ができればと思っております。荒井教育顧問にもご出席をいただきました。専門的な見地からのお話も交えて進めていければと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

赤羽教育次長 続きまして、教育長からご挨拶をお願いします。

教育長 皆様、こんにちは。改めまして、お忙しい中、長野県教育委員会の今井先生にお越しいたきまして、本当にありがとうございます。それから信州大学の荒井先生も、お忙しい中、駆けつけていただいてありがとうございます。

ただいま市長から今日のテーマを選んだ経過などお話がありましたけれども、今井先生のお話の中に出てくると思うのですが、昨年度1年間、長野県と長野県教育委員会が「特色ある県立高校づくり懇談会」というタイトルで、高校のこれからの在り方について6回にわたって懇談を行った場に、私も自治体の教育関係者ということで、メンバーとして参加をさせていただきました。大変刺激的な参考になる会議でしたけれども、私たちは小中学校が守備範囲で、子どもたちには自分らしく、その子らしく生きていってほしい、そのための学びを大事に考えているのですが、中学校の先にある高校が、子どもたちが将来自分らしく生きるための選択をする上でとても重要な鍵になるということ、この懇談会のいろんな議論を通して感じました。15歳の子どもたちが具体的なビジョンを描くことが豊かな将来につながっていくと思うのですが、そのためには、高校の学びの場が多様で豊かで、そして魅力的であることが、中学校の子どもたちが将来に向けて自分がどんなふうに進んでいこうかと考える上での一つのモチベーションになると思います。今、県の今井先生にご苦勞をいただいて取り組んでいる高校改革に、私たちとしても何らかの形で協力ができればと考えております。

今日は皆さん、市長も含めていろんな議論を進めて、一つでも何かお互いにできることを進めていく機会になればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

赤羽教育次長 それでは、早速議事に入ります。

本日の議題は、「高校改革への期待 ～夢に挑戦する学び～」です。

初めに、長野県教育委員会高校改革推進役の今井義明様からお話をいただいた後、市長、教育長及び教育委員の皆様からの意見交換を行い、荒井教育顧問からのご助言をお願いしたいと思います。

それでは、今井様、よろしくお願いいたします。

今井氏 皆さん、こんにちは。

県教育委員会の高校改革推進役を仰せつかっております、今井義明と申します。既に定年退職をしております、会計年度任用職員２年目になります。いろいろとお世話になった県教委ですので、御礼奉公のつもりで今一生懸命やっています。

元は高校教員で、平成２９年度から令和２年度まで４年間は松本深志高校の校長として、母校で校長ができる幸せを十分に味わせてもらいまして、当時、松本深志高校は、野球部に全国的にやや有名な選手がいて、球場に行くと応援団のＴシャツを着た臥雲市長とよくお会いしたなど、そういう思いはあります。高校の教員として本当にいろいろと経験させてもらったと思うのですが、今年で県庁は１３年目の勤務になります。生活本拠地は安曇野市です。どうか今日はよろしくお願いいたします。

さて、私に本日与えられたテーマは、長野県における主にソフト面、学びを中心とした高校改革について話題が提供できればということです。

このテーマが「高校改革への期待 ～夢に挑戦する学び～」となっておりますけれども、これは今進めている高校の第２期再編の実施方針のタイトルになります。これをつくったのは平成３０年です。その前に、平成２８年に「学びの改革基本構想」を出してまして、当時、私は高校教育課長をやらせてもらったので私もそこに多く関わらせてもらって、これが第２期再編のスタートになっています。

２期再編の基本理念は、新たな教育の推進と新たな高校づくりを一体的に取り組もう。つまり、再編というどうしても、どことどこを統合してどこを廃校にするみたいな話になりがちですが、既存校も含めて、学びの中身ももっと魅力あるものにしていく大きなきっかけにしようという高邁な理念で進めてきました。

長野県は、1期再編が平成18年から始まったのですが、県議会でほとんど否決されてしまうような出し方をしてしまったものですから、その反省もありまして、2期再編は本当に丁寧に進めています。

今回の2期再編は、県立高校を都市部存立校と中山間地存立校の2つの部に分けました。おおざっぱに言うと、近くを選択できる高校が複数ある場合は都市部存立校、そういう選択肢がない、町とか村に1つしかない学校は中山間地存立校というふうに全部の高校を分けました。都市部存立校については、規模の大きい学校ということは一つの魅力なのではないかと。いろいろとスケールメリットがありますので、この大きさを生かすためには、どうしても都市部の高校は今の学校数ではもたないということで、都市部の存立校は2期再編で再編していきましよう。

一方で、中山間地存立校というのは、長野県は南北に非常に広い、長いというのがありまして、近くに高校がないケースがほとんどですので、そういった高校は規模が小さくなっても可能な限り存続させていこうということで2期再編は進めてきています。

長野県の通学区は、一応12個に通学区は分かれています。その12通学区ごとに協議会を組織していただいて、県立高校とはいえ、市町村の皆さんあるいは保護者の皆さん、将来高校に入ってくる皆さん、同窓会の皆さんあるいは地域の産業界の皆さんもそうですが、県立高校の在り方とは密接不可分ということで、地域の高校の在り方をまず地域の皆さんで将来像を含めて議論していただければということで、協議会を立ち上げていただきました。この松本地区、旧第11通学区だけは、協議会ではなくて懇話会という名称で意見交換をしていただきました。この会に臥雲市長にも伊佐治教育長にもご出席をいただきました。かつ、荒井先生には座長という本当に大変なご苦勞をいただきまして、荒井先生の忍耐強さに敬意を表したいと思っています。ありがとうございました。

今度はそれぞれの統合校の会が始まりましたが、大変な状況は引き続けます。

全県的に高校再編がどれくらい進んでいるかを簡単に触れさせてもらいます。2期再編は一次、二次、三次と発表を分けていますが、意見がまとまっ

たところからどんどん進めていこうということで、まず一次は3校。小諸商業と小諸が小諸義塾高校、既に名前も決まっています。それから野沢北と野沢南が佐久新校。伊那北と伊那弥生ヶ丘は伊那新校ということで、こちらは既に細かい校舎の設計まで話が進んでいます。

二次で発表したのが、中野市の2つの高校が総合学科高校に、須坂東と須坂創成は普通科と職業科を統合する新たな新校になります。伊那地区はダイナミックに再編が進んでいまして、辰野高校の商業科と箕輪進修高校の工業科と上伊那農業高校の農業科と駒ヶ根工業高校の工業科を一緒にして、上伊那総合技術新校として、上伊那農業高校の跡地につくるところまで話が決まっています。赤穂高校は総合学科高校に転換します。

三次は去年の3月に発表になったのですが、長野東高校を「スーパーフレックス新校」と名づけていますが、多部制単位制高校にして、ここに幾つかの夜間定時制と戸隠分校を統合します。それから、更級農業、松代高校の商業科、屋代南高校を、長野千曲総合技術新校にしようということになっています。岡谷東と岡谷南は岡谷新校になります。さらに、岡谷工業と諏訪実業高校が岡谷諏訪総合技術新校になります。ようやく11区が出てきますが、塩尻志学館と田川高校が塩尻総合学科新校になります。南安曇農業高校と穂高商業高校と池田工業高校は、池田工業高校が旧12通学区にあるので通学区をまたいだ初めての統合になりますが、安曇野総合技術新校。それから、茅野と富士見で茅野富士見新校ということになっています。

さらに三次は定時制・通信制の配置ということで、幾つかの定時制をどのように統合していくかを細かく決めています。定時制については先ほどの長野東の多部制単位制の統合が最も大きな話題になります。

今回、1期再編と違って2期再編になって強く感じるものの一つに、県立高校の再編とまちづくりや地域振興がセットで語られることが本当に多い。特に、伊那市あるいは佐久市といった大きな市は、市全体の位置づけの中に県立高校の新校があるという感じです。学校は地域づくりのためにあるわけではないと思うのですが、一方で、高校の存在が地域の活気や活力とつながっていることは本当に実感します。

高校自体も、地域の支えがないと、特に探究的な学びなどは進められない

面もありますので、佐久・伊那・小諸の新校には「地域連携協働室」をつくることになっています。ここでは地域の方たちが自由に出入りして、高校生と交流しながら何か協働してできることがないかという部屋にしようと。また、学校の枠を超えながら、地元の企業や大学、もちろん自治体の皆さんもそうですし、医療機関、福祉施設、様々な教育機関あるいは高校同士で連携しながら、「共学共創コンソーシアム」を立ち上げて、学びの拠点としての高校という位置づけにしていこうと思っています。

子どもは家庭で育てて、学校で鍛えて、地域で磨くみたいなのところがありますけれども、この三者の連携がうまく機能していくような条件整備、環境整備をしていきたいなと思っています。

1 1 通学区に限ると、塩尻市と安曇野市は統合がこれから進んでいきますが、松本市内は実は手つかず。1 期再編のときも、松本工業の定時制が松本筑摩に移って松本筑摩が多部制単位制になるだけでした。なぜ松本市内は手をつけられないかという問題がありますけれども、私立高校との関係が非常に変化してきまして、県立高校の再編は簡単にはいかないかなと。後ほどまたこの点は触れさせていただきたいと思います。

再編は、なかなかうまくいかないです。どこかの高校がなくなるわけで、なくなる学校の卒業生や地域の皆さんは学校のことを本当に大事に考えてくれている。そういう意味では、すごくありがたいですが、一方で、その思いがあまりに強いと、次の世代の子どもたちのためにという視点がなかなか前に出てこないという、本当にもどかしい思いをしながら、地を這うような毎日を送っています。

さて、肝心のソフト面、学びの改革にお話を移らせてもらいます。

昨年度から、県でも第4次長野県教育振興基本計画が動き出していて、一人ひとりの「好き」あるいは「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できる「探究県」長野の学びをぜひ実現させていこうというスローガンを掲げています。ここで目指す姿は「個人と社会のウェルビーイングの実現」、その実現のためには、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させながら推進していくことが必要であるし、そこにはやはり探究的な学びが核になることが必要だろうと思って、県の施策も進めています。

校長のときも実感したのですが、コロナ禍の３年間、本当につらい３年間でしたけれども、授業の面では劇的に変わった面もあります。特にＩＣＴを活用した学びが本当に広がりました。今、電子黒板は、全ての普通教室に設置されています。電子黒板を使わないと授業にならない状況ですし、ＢＹＯＤによる１人１台端末も、今年の１年生で全学年・高校そろいました。そのように端末を活用した授業が今行われています。

ＩＣＴは道具の一つですので、これが果たして良い方向に行っているのか悪い方向に行っているのかは、意見が分かれるところなのかなとは思いますが、一方で荒井先生がご指導していただいている松本県ヶ丘高校では、ＩＣＴ機器を駆使しながら探究的な学びを積極的に取り組んで、それが学校の大きな特色になっています。

高校の特色がなかなか外に伝わっていないこともありまして、昨年度１年間かけて「特色ある県立高校づくり懇談会」を開催いたしました。伊佐治教育長にも荒井先生にも出ていただいて、本当にたくさんのご意見をいただきました。フリートーキングだったので、何かをまとめる会議ではなかったのですが、その中で出てきた意見の中から、県教委としてこれを実現していこうという具体的な施策をまとめて、今年の９月に公表したところです。この特色化について、どんなことをこれから進めていこうとしているかを触れさせていただきたいと思います。

今進めたいと思っているのは、特色化をするための方策として４つの視点を挙げました。１つは、「様々な選択肢から、自分の進路に向かって学びたいことをとことん学べる」、２は「社会に求められる技術・能力が身につく」、３は「長野県のリソースを使った地域の学びができる」、４は「一人ひとりの個性や多様性が尊重される」。これはどれも大事なことですし、どの高校でも取り組んでもらわなければいけないことですが、特にその学校で力を入れていきたいことをしっかりと考えていただいて、具体的にその学校ではどういう取り組みをするかを今検討してもらっています。１つに絞れない学校もいっぱいあると思うのですが、高校は入試を経て入ってきている生徒ですので、それぞれの高校の果たす役割が高校によってありますし、期待されるものも違いますし、存在する地域によって様々な地域の関わりもありますので、み

んな同じ高校ということはありませんが、その役割や特色をこの4つの視点でもう一回しっかりと明文化してもらって、さらに磨きをかけてもらいたい。なおかつ、それが外に分かるようにPRしてくださいとお願いをしているところです。

この4つの視点について、具体的な施策としてどんなことを県は提案して各校に検討してもらっているかが、その次にあります。

まず、1の「様々な選択肢から、自分の進路に向かって学びたいことをとことん学べます」の最初には、「特定の大学への進学支援」に力を入れたい。難関大学や医学部にしっかりと進路保障をしていく高校は長野県にはないのですかと、よく言われてしまうのですよね。ですので、ここが自校の特色ですと言い切ってもらえる高校が出るように、期待されている役割を認識している高校は幾つもありますので、その高校に今働きかけているところです。

それから、「大学との連携」は今大分進んでいるという実感ですけれども、いろいろな高校がいろいろな大学とのつながりを持てる時代になっていますので、これを特色とされてはどうかということです。

それから、「英語教育の強化」も、今非常に期待が強いところです。長野県の高校でも海外大学へ進学する生徒も出てきていますし、英語が話せる生徒に対する期待感も相当ある中で、長野県にも国際教養科という学科が幾つかの高校に設置されていますが、そこがまず先頭に立ってもらって、もっと尖った英語教育の取り組みをしてほしいということで、具体的に挙げている10の提案をぜひ学校でも検討してくださいと言っています。

それから「ICT」ですが、中山間地の学校に遠隔授業でICTの授業を配信することで、小規模になっても学びの質の保証ができないかと。もっとしっかりと保障してあげなければいけないのではないかという問題意識です。教員定数は学校規模で決まるので、小さい学校になってしまうと教員定数が減ってしまいます。そうすると教科の先生が十分に揃えられない。例えば、理科は、物理、化学、生物、地学の4科目がありますが、規模が小さくなると4人の先生を揃えられないので、学ぶ選択肢の幅も狭くなってしまいます。そういったことをICTを活用してフォローできないか、都市部と同じような教育環境で大学進学を目指すことがICTで補完できないかと考えており

ます。

それから、「職業科における進学支援」は、懇談会の中でも工業高校や農業高校の生徒から出たのですが、専門科目が多くなるので、農業科や工業科を出て大学進学をする子はいっぱいいるのですが、例えば数Ⅲをやるカリキュラムの余裕がないという生徒もいて、不安を持っていました。これもICTを活用してうまく補完できないかなと、今、考えてもらっています。

2番の「社会に求められる技術・能力が身につく」は、職業高校を意識しているのですが、「デュアルシステム」が今いろんな高校で取り組まれています。これは高校と企業とで連携を取りながら、一定期間、生徒が企業へ行って研修を積むという取り組みです。最新の機械を使ったり、あるいは企業で今どんな課題をどういうふうに解決しているのかをOJTみたいな形でやって単位として認めるという取り組みですが、こういった取り組みをもっと推進していく。今、起業家マインドを求められている中で、特に職業高校の生徒はそういった精神も醸成してもらえればいいなと思っております。

それから、「全国募集」も考えています。長野県独自の学び、今行われているのは、白馬高校の国際観光科と飯山高校のスポーツ科、木曽青峰の森林環境科、小諸高校の音楽科といった特色ある学校を全国募集にして、さらなる多様な生徒を受け入れられないかといったこと。あるいは介護福祉士養成コースですとか、期待の強いデジタル人材の育成ができる学びを検討してほしいとお願いをしています。

また、「職業教育の更なる充実」、県立高専という話は少しハードルが高いかなとは思いますが、工科短大あるいは職業科、農業大学、林業大学は検討の余地があると思っています。

「メイクやマナーの学びの提供」というお話も出ています。社会人として必要な知識をもっと高校生に伝えてほしいと。

3番の「長野県のリソースを使った地域での学び」は、既に行われていますが、地域課題を探求的な学びの中に取り入れながら、地域と一緒に協働しながら探究できるような学び、あるいは「信州学」を柱とした郷土学習も、特色としてさらに推進してほしいと。地域とつながるためには、そのコーディネートをしてくれる人も必要だという中で、専門家を置くことをこれから

検討していきたいと思っています。

それから「高校の地域拠点化」については、いろいろと条件整備をしていきたいと思っています。

高校での「個別最適な学び」については、単位制の導入を提案していますので、各学校がこのことについて検討しています。

「キャリア教育の充実」については、地域の企業と高校生がもっと結びついてもらえれば、たとえ大学で外へ出てもまた戻ってきてもらえたり、地域に残る選択をしてくれる生徒が増えるのではないかと思います。

「生徒の幅広いニーズに合わせた支援」については、今、様々な生徒がいます。部活を一生懸命やりたい子もいれば、進学だけに専念したい子もいますし、障害のある生徒さん、不登校を経験した子、あるいは外国籍の子など、多様化している生徒の中で、それぞれのニーズに合わせたきめ細かな支援ができる学校を、多部制・単位制が中心になると思うのですが、しっかり考えてほしいということになっています。

「一人ひとりの個性や多様性の尊重」は、「中学生への新たな希望調査」や「時代にふさわしい入学者選抜制度」、そして「入学後の転入・転科」をもっと自由にといった意見も聞きますので、これも県として検討していきたいと思います。

最後に、今年、中学生にアンケートをとりました。高校は、入学予定者希望調査を年2回実施して志願状況を見るのですが、どの高校に行くかという希望ではなくて、高校に入ったらどんな学びをしたいかとい、もっと前段階の希望が取れないかと思ひまして、今年中学校の先生方にご協力をいただき、4月に中学3年生を対象に希望調査を実施しました。まだ公表していないのでお手元にはないですが、いろいろと考えさせられるデータがありました。

中学卒業後に進みたい進路に関する調査で、県内の公立高校に進みたいか、私立高校に進みたいか、県外の高校に進みたいかという希望調査は、全体的に見ると県内の公立高校に進みたいという生徒が8割ですが、第4通学区（中信地区）だけ見ると「私立高校」に進みたいという生徒が13.8%いるんです。これは4つの通学区の中でも段トツのトップです。つまり、この段階で松本市内の私立高校に行きたいと言っている子がこれだけいる。これは一

つの特徴です。

次にどの学科で学びたいかですが、旧第11通学区の特徴として「普通科」が非常に多い。4つの通学区で一番多い。これも、松本市内には職業科が松本工業しかないのも非常に大きいですし、私立高校はほとんどが普通科だということもあろうかと思います。

最後に、高校選択の際に重視するものは何ですかという質問では、自宅から近いなどの「通いやすさ」と「学校の雰囲気」の2つを挙げる生徒が非常に多いです。通学区制度は自宅から通える範囲に高校をとということなので、その範囲にきちんと選択肢があるのは大事というのは県の基本方針どおりなので良いのですが、「学校の雰囲気」を生徒は何を見てどうやって感じているのか、どこで判断しているのかなというのは、もう少し深掘りしないといけないと思っています。

それから、特色ある取組みを行っているなどの「授業内容」が大事だという回答が、実は下のほうになってしまいます。この選択肢がもっと増えるように、あの学校へ行くところという学びがあって、その学びをしたいからこの高校を選びたいということを、私たちがもっと増やしていくような特色化を進められるといいなと思いながら、今、県立高校の特色化について検討しているところです。

高校に関わる問題は様々な要因があって、一筋縄ではいかないところがありますが、現場としっかり連携して、県教委として県立高校の特色化を進めながら、生徒の選択肢としての高校を充実させていきたいなと思います。

私からは以上でございます。

赤羽教育次長 今井様、ありがとうございました。

それでは、ここからの意見交換の進行は、臥雲市長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

臥雲市長 今井様、ありがとうございました。

県立高校の特色化ということでご説明いただいた今後の方向性の論点が、私たちが考えているものを網羅されていて、そしてあれだけ数が多いということは、改めて今井さんの仕事が大変だなと感じるとともに、もし論点が一一つ実現していったら、松本で暮らしている子どもたちや、あるいは東京

圏で暮らしていて松本への移住を考えていても、学校や教育の問題がネックになって踏みとどまってしまうこともクリアできるのだろうな、どうやったら実現していけるかなと、お話を聴きながら感じておりました。

今日の議論は、今お話しいただいたことを踏まえたフリースクールということで、特に松本に引きつけながら発言をしていただければ、これから私たちがやっていくヒント、そして今井さんをはじめとした長野県の皆さんへの働きかけにつながっていくかなと思っていますので、どうかそれぞれご発言いただければと思います。

まず、これからお子さんが進んでいく立場にある福澤さんからご発言をお願いします。

福澤委員 アンケートの中にあったように、子どもたちがこれから何をしたいのかがしっかり描けていない状況で、「学校の雰囲気」で高校を選ぶというところは、その子にとって果たしてプラスになっていくのかは読めない部分だなという気がしました。中学校のとき、さらには小学校のときからも、自分がどんなことに興味を持って将来取り組んでいきたいかに思いを巡らせるきっかけとなるような探究的な取り組みを、様々行っていく必要がある気がしました。

私自身、中学までは松本にいたのですが、高専に行き、高校とは少し違う環境で5年間学びました。中学3年生で将来がある程度決まってしまう進路に進んではみたのですが、自分のやりたいことは少し違うなと進路を変えました。子どもが挑戦できるきっかけづくりが大切だと感じました。

臥雲市長 逆に「学校の雰囲気」以外に、現状あまり選択肢が提供されていないという裏読みもできるなと思って数字を見ました。少なくとも自分たちが高校進学をするときも、特に松本のいわゆる市内4校については、校風が少し違うことと、あとは中学の成績で大体この順番ですよということで、社会的通念として定着もして、それほど将来の進路にマイナスではないと受け止められたからそうだったということになると思います。やはり、特色ある取り組みを行っているからこういう選択をしたいというふうにならばいいと思います。

特に、松本の場合は、私学が学校経営の危機感からその方向にかなり踏み込んでいることから、余計にこの対比として松本で暮らしている方々には感

じられているのではないかと思います。

佐藤さん、いかがでしょうか。

佐藤委員 私は出身が岡山県倉敷市なので、ここに来て最初に驚いたのが、皆さん最終学歴ではなくて出身高校をおっしゃるところで、何かそれは高校に対する誇りであり、それが今井先生が進められる中での難しさになるのかもしれないと思う一方、柕池に遊びに行ったときには、「松本はいいね、子どもの進学の実績がある」と羨ましがっている方がいて、なるほど松本はそういう土地なのだとそのときに感じました。

これは感想になるのですが、今、松本市でも中山間地の学校について小規模特認校制度を進めている中で、ここについてもまちづくり、その学校があるということがそのまちや地域を特徴づけるということも、今回のお話で共通する点かなと思いました。

私自身の子どもは今17歳と19歳ですが、上の子どもは私立高校をその特色をもって選びました。探究的な学びで大学との連携が強くあるところが、選択した際の一つ大きな基準になったので、やはりこの地域に信州大学松本キャンパスがあることから、今回最初に挙げてくださっていた大学との連携強化が、一つこの地域の特色になり得るのではないかなと改めて感じました。

臥雲市長 伊佐治さんはどうでしょうか。

教育長 今日改めてお話をお聞きして、去年1年間の懇話会を振り返ったのですが、魅力的な高校と言ったときに、小中にもつながると思うのですが、選択できる余地が学校の中にあると、それが子どもたちにとって魅力的な環境になるのではないかなと改めて感じました。

というのは、その懇話会の中で高校生と意見交換をしまして、1回目はたしか職業高校の生徒さんとグループの中で話をしたのですが、印象的だったのが松本工業高校の生徒さんで、自分は将来の職業を選ぶときにICTを学んでおくことがプラスだろうと思って、就職を想定して松本工業高校を選んで専門の勉強をしたけれど、2年生が終わる頃になって、自分が学んできたことを即社会に出て生かせるけれど、もう少し深く幅広く学んでみたいと思った。だけど、大学進学を考えると、松本工業高校には進学したいときの専門的な勉強が用意されていないので、それがネックになっているとおっしゃ

っていて、それは鋭い意見だなと思いました。

だから、１５歳のときに一旦自分が選んだその道が、２～３年経って１７～１８歳になったときに、もう一回こういうこともやってみたい、再チャレンジしてみたい、もう一回ここに戻りたいということが用意されていること、難関大学へ行きたいと思ったらＩＣＴを活用してサポートしてくれるとか、編入ができるとか、そういう姿が見えるようになることはとても大事なことでないかなと思いました。

今Ｎ高やＳ高があって、ドワンゴがＺＥＮ大学というのをつくったことを考えると、やはりそういうＩＣＴを活用した学びが、場所を選ばず、遠くまで通学ができなくても、勉強したいと思ったら自由に選択ができるということがかなえられればいいかなと思いました。

それともう一点は、松商学園がスーパーサイエンスハイスクールに指定され、その運営委員会の委員として先日出席させてもらい、子どもたちが研究の中間発表をしてくれたのですが、子どもたちが課題として感じて研究をしている中身の半分以上が、今、松本市の行政として抱えている課題を、子どもたちが同じようにまちづくりの課題として捉えて研究しているんですね。なので、先ほど今井先生がデュアルシステムのことをおっしゃったのですが、企業と同様に行政ともタッグを組んで、高校生の力を実際に行政課題の解決につなげていくことができると、松本市に限らず自治体にとっても大きな力になるのではないかなと思いました。

つい先日の日曜日に、子どもたちの提案を受けたのですが、中でもＩＣＴの力を駆使して、松本市が今までできなかったような、松本市内の高校生の居場所を紹介する作り込みをした高校生のお話を聞いて可能性を感じました。

臥雲市長　　今井さん、今、伊佐治さんがおっしゃったことの中に、高校３年間の中で編入学っていう選択肢を、長野県の県立高校で考えていく可能性はあると思われませんか。現実にはそれをやるのは、極めてナローパスでしょうね。

今井氏　　今、全日制は、一家転住や転居を伴うもの以外は認めていません。でも、伊佐治教育長が言われたように、入ってから進路変更ができるような制度を研究しているところです。高校の場合は定員がありますので、定員を超える場合の対処の仕方とか、入試制度とか、いろいろ超えなければいけないハー

ドルがあると思いますが、そこは結構肝だと思っていますので、もう少し研究をしたいと思っています。

臥雲市長 松本市あるいは松本市教育委員会の立場からすると、高校や県教委の皆さんが県立高校の特色化を試行錯誤しながら進めていることを、もっと中学生に伝えていく、できる限りきめ細かく、響くような手法や頻度で情報提供していくのは、我々側がまずできる高校改革への第一歩かなと思いましたが、教育長、いかがですか。

教育長 懇話会の中でも、松本工業の生徒のドローンを使ったネズミ退治のプレゼンを受けたときに、委員の皆さんが「中学生にこのプレゼンをすれば、松本工業に来たいと思う子は格段に増えるね」という話がありました。高校で、生徒がどんな取組みをどんな姿でしているかに直に触れることは、あのときに本当に大事なことだなと思いました。

なので、例えば、松本市教委として、インタビュー形式で10問ぐらい、自分の高校について生徒会長などに答えてもらったのを子どもたちに伝えていくとかをもし高校が許してくださるなら、興味を持って主体的に選択してもらえる一助になるかなと感じました。

臥雲市長 今井さんから見るとどうですか。

今井氏 情報発信の仕方については、懇話会で指摘されたのですが、今の若い人は高校のホームページなんか見ないよと、もっとSNSを使って個人に届くようにと言われているので、柔軟に考えなければいけないなと思っています。

教育長 各高校の魅力を紹介する動画をつくって松本市のシンカチャンネルに載せるとかは駄目でしょうか。

今井氏 具体的なご相談をいただければ、駄目なことはないと思います。

臥雲市長 春原さん、いかがでしょうか。

春原委員 高校生人口といえば、戦後ベビーブームの世代（1965年代）の生徒数はとても多かったと記憶しています。以後増減しながらも、このところの統計調査では、ここ30年は減少局面に突入しているという状況からも、高校再編が検討されてきていると思います。

先ほどの先生のお話の中で、県立高校といえども、学校や家庭、地域や企業と堅固な連携を育んでいかなければならないと受け止めました。子どもた

ちが自分の将来の夢や目標を持つきっかけは、何らかの刺激を受け、私は将来こうしたい、将来こうなりたいと。そのために自らの価値を生み出す学びに結びつけていくことだと思います。今の高校生を見ると、ややもすれば義務教育からの延長線上にいるお利口な高校生ですね、大事に保護されているということはとてもいいことであると思います。が、自分の可能性を生産的に考えていける環境を整えれば、あとは自信をもって行動してほしいと思っていますところですよ。

臥雲市長 高校の全日制に通う割合は、通信制の充実などで減少傾向にある一方で、今春原さんがおっしゃったように、高校進学率は限りなく100%に近い。ここが今日本において15歳～18歳の教育や学びの在り方を考えるときの根本がかなり変わったところだと思います。ある段階からそうなっているのに対して、なかなかギアチェンジができていない。小中と高が本来なら地続きになってもいいはずで、大都市圏だと私立の小中高、あるいは中高一貫とが増えている背景にもそれは一つあると思うのですが、今井さんから見てこの15歳～18歳に対しての私たちのアプローチの根本みたいなところで、中高一貫的なものをもっと県立に取り入れるということは、なかなか難しいのでしょうか。

今井氏 中高一貫校については、1期再編で屋代と諏訪清陵に県立として設置をして、検証もされているのですが、やはり設置の希望は非常に多いですね。中高一貫というメリットを非常に感じられている方が多いと思うのですが、幾つか懸念する点が教育委員会としてありまして、まずよく言われているがその地域のいわゆる成績が上位の子たちが中高一貫校に行くと、公立中学の地盤沈下みたいなことが起こってしまうのではないと言われる部分があって、それに対してきちんと分析ができてないということと、清陵と屋代も先日募集が終わりましたが、倍率が3倍前後なんですね。それが一体どういう数字なのか。屋代は東北信、清陵は中南信ですが、それでこの倍率なのにもう1校つくことで倍率がいくのかどうか。さらに、やはり私立のほうが非常に対応が早くて、私立の中高一貫校が今増えています。松本市内も松本国際が始められましたし、長野市内でも幾つも始めている中で、県立でつくる見通しが持てないなど。ただ、希望は非常に多いです、頑なにこれから

も作らないというわけではないと個人的には思っています。

臥雲市長 小柳さん、どうぞ。

小柳委員 今後の取組みの方向を詳しく知ることができました、ありがとうございます。高校はそれぞれの伝統があって今に至っているのも、なかなか再編は大変なのだなとつくづく思いました。

お話をお聞きして、2つの点について思うことがありました。

1つは、多様な生徒たちへの多様な受入れ体制を高校で用意していくことをぜひ充実してもらいたいということです。2つ目は学校の特色化にかかわる情報提供を充実させてもらいたいということです。

実は高校の単位について改めて調べてみました。50分の授業を35回実施して1単位とし、卒業には74単位と設定しているようです。その単位数の増減でも特色が出てくるのではないかなと思いました。

そこで、これから受験しようとする中学生たちに、この学校は単位の制度がどうなっているのかということも含めて、学習の仕組みも丁寧に情報提供していく必要があるのではないかなという気がしました。学校の雰囲気はもちろん、高校の学習の仕組みも、中学1年生あたりから伝えてもいいのではないかと思います。

最後に単位についてですが、限られた人生の時間中で悠長なことは言っていられない面はありますが、単位を3年間で取るという年限を決めることはどうなのだろうかと思います。1単位を取るために50分の授業を35回受けるのに5年かかってもよいのではないかなと思ったりします。緩やかな学びが提供できる高校であっても良いのではないのでしょうか。

臥雲市長 今、高校の単位に着目して、小柳さんから幾つかご意見をいただきましたが、今の高校は単位制なのですね。今井さん、この単位をどう捉えればいいですか。

今井氏 高校は基本的に単位制なのですが、一方で学年制を併用しているところがほとんどで、みんな同じカリキュラムを1年間やって全部単位を取れば2年に進級というシステムになっています。そうすると、恐らく90単位ぐらい取って卒業ということになっています。ところが、今、小柳委員が言われたように、法律上は74単位取れば卒業が認められます。そうすると、74単

位というのは3で割ると2.5なので、1週間だと5時間、5日間で卒業するための単位は取れるはずです。もちろん大学進学とかいろんなことを考えたときに、これだけの授業が必要だと思って学校はやっています。

でも、単位制高校は、完全に学年がない、74単位取ったら卒業を認めましょうというのが基本です。そういう高校をこれからつくっていきたいなと思っていて、それは修了年齢もない、74単位取ればいい。ただ、2年で取って2年で卒業を認めるわけにはいかないのですが、もっと自分のカリキュラムも含めての設計ができるような高校生活、1～2年でたくさん単位を取って3年は海外へ行ったりアルバイトしたり大学進学の勉強をしたりとか何でもいいのですが、何かそういった自由度ができるといいなというのは、本当に私も同感です。

臥雲市長 ここまで皆さんからいろいろな観点からご意見をいただきました。

荒井さんからお感じになったことをお話しいただければと思います。

荒井教育顧問 高校再編というテーマはとても難しいです。全国を見ても、ここがうまくいっていたというのがなかなかない難しいと思います。

先ほど小柳委員から、「緩やかな」という話が出ましたが、確かに高校生と日々触れ合っていると、日々充実していると言える反面、本当に忙しいと感じられることが少なくありません。

一方、中学生に目を向けた場合、例えば、ちょうどこの時期に中学校2年生は「進路希望調査」が行われ、就職と進学のいずれを希望するか、進学を希望する場合は第1志望と第2志望を書いて提出するということが行われています。そしてその内容を踏まえて、12月上旬に親御さんも交えて個別面談が行われる運びとなっています。

社会が大きく変化していることを目の当たりにする中で、多くの親御さんや中学生は、多様な選択肢から選択をしたいという思いを持っていながらも、現状ではその選択肢の幅や深みがまだ見えないのではないかと思います。また、中学校生活を日々頑張っている中で、自分自身のキャリアに対する理解を深める機会もあまりないのではないかと思います。選択肢があれば選びたい、けれどもそれを選択する自分自身の理解が深まってない、従って、差し当たり安全圏で「普通科」を選択するというのが、先ほどのデータの背景に

はあるのではないかと思います。言い換えれば、選択肢があるかどうかということと、選択肢を選ぶことにきちんと向き合っているかどうかの間には、少しズレがあるのではないかと思います。

高校現場はコロナ禍を経て劇的に変わってきていますがそれがなかなか可視化されていない実情もあります。今では、日々の授業のスタイルもさることながら、学習者の視点でみた場合、1つは「学ぶ方法」を選択できるかというポイントがあります。つまり、今までは対面でしか学べないというものから、ICTを活用しながら学ぶ、オンラインで学ぶことをある意味体験している高校生からすれば、対面でしか学べないという状況は消極的なものとして映るのではないかと思います。

2つ目が、「学ぶ内容」を選択できるかというポイントです。現状では同じ高校に進学すればほぼ同じ内容を学ぶということが前提とされがちですが、もしその前提が流動化した場合、高校現場の大学化のようなことが生じてくることになります。

なお、私立学校の隆盛に鑑みた場合、保護者にとっては、選択肢があるかないかよりも、生徒の多様な進路選択に向き合いケアする体制が整っているという印象を私立学校にもたれているのではないかと思います。

最後に、情報提供ですが、中信地区の高校では探究的な学びにとっても熱心に尽力されています。松本県ヶ丘高校には探究科がありますけれども、「探究」は特定の学校の専売特許ではないため、今では中信地区全体で高校が一緒に探究に向き合っていく取組みも行われています。

臥雲市長 改めてコロナで劇的に変わった部分がある。そして、中信地区では探究学科のある縣陵だけではなく、いろいろな高校がそういう方向に向けて既に変わりつつあるとすれば、その高校の現状について、より詳らかに早い段階から中学生に伝えていくことが、松本市の中学校現場を預かる私たちとしては、何か具体的な手だてを取る必要があるのではないかなと思いました。

今、皆さん一通りご発言をいただきましたが、それぞれのお話を聞いてさらにお話いただける方はお願いしたいのですが、佐藤さん、どうでしょうか。

佐藤委員 私自身が外国由来の子どもに関わっているという観点から、昨日の日経新聞で、愛知県で外国の子どもたち、日本語が苦手な子どもたちに特化した中

高一貫校ができたというニュースがありましたが、その背景には、日本語が苦手な子どもたちの高校中退率が日本人の7倍というデータがあります。松本市子ども日本語教育センターで子どもたちの日本語支援、また高校への進学支援をする中で、県立高校に進学した後の中退率が高いというのは、やはりこの地域でも変わらず、そういう部分が何らか今後多様性の中の一つの視点として置かれるようなことがあればいいなと考えています。

臥雲市長 今の点、今井さんいかがですか。

今井氏 そうですね。外国由来の生徒さんが一定数ずっといらっしゃるのですが、言葉の問題をどうやって支援できるかが、学校現場の悩みでもあります。英語の先生はいるのですが、そのほかの言語は職員では対応できないというときに、生徒は相当ストレスだろうなと思いますので、どんな支援ができるか、ぜひご助言いただければと思います。

臥雲市長 ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

そろそろ時間になりました。先ほど今井さんの話でありましたが、「松本市内の高校再編は手つかずだ」と。実際に、2期再編でこの学区でも塩尻と安曇野の学校だけで、人口あるいは子どもの数という意味で再編の必要性の優先順位がそこまで高くなかったということではありますが、一方でこれだけ学びの改革への需要が高まっていて、私立高校がたくさんある松本だからこそ、松本市内の県立高校の在り方への市民の皆さんの期待、あるいは現状への物足りなさも私たちのところ伝わってくる声だなと思いました。

高校の問題を手つかずでない状態にするためには、教育現場の皆さんだけでは解決できない、そもそも着手すらままならない状況も、特にこのまちには少なからずあったと思います。ただ、今後のことを考えたときに、東京圏に人が集中し続ける状況が、我々にとっても、またもっと広い視点に立っても好ましくないことについて、一定のコンセンサスがありながら、そうした動きにブレーキがかかってしまうということは、この行政を預かる立場から、何らかの前向きな動きが生まれてくるようにしたいなと思います。

今日、まずはいろいろな取組みをお聴きできたことだけで有意義な時間だったと思いますし、先ほどの中学生に対して早い段階から高校改革あるいは現状についての情報提供を多面的に行っていくということには、教育長をは

じめ、皆さんで取り組んでいただきたいと思います。将来に向けての松本市内の高校改革も、我々もいろんな声もいただいて、そしてその声を県側にもしっかりお伝えして前に進めていければと思っております。

今日は短い時間でしたが、今井先生をはじめ、皆さんありがとうございました。

赤羽教育次長 本日予定していた議事は全て終わりました。

本日の内容につきましては、事務局で会議録を作成し、速やかに公表してまいります。

以上をもちまして、令和6年度第2回松本市総合教育会議を閉じます。ありがとうございました。

《閉会宣言》

教育次長 令和6年度第2回松本市総合教育会議を閉じる旨宣言した。

<午後2時40分閉会>

会議録調製職員

教育政策課教育政策担当係長

伏見 宏美